

『明汗稿徒然草奥儀抄』 (四)

—翻刻と解説—

大坪利絹

【明汗稿四・引用書目並特別語彙】

○引用書目。() 内は段数。

- 瑯邪代醉編十二 (135) 徹書記物語・玉葉集・莊子・管子形勝篇^(マツ)・久安百首・有賀長伯の和歌分類・賓頭盧為優陀
延王說法經 (以上137、大坪注) 管子形勝篇トアルハ、形勢、或イハ形勢ノコトナリ 徒然草文段鈔 (138) 孟子
・礼記坊記 (以上141、大坪注) 坊記ハ礼記ノ第三十卷ノ名ナリ 文段鈔 (142) 孟子離婁篇 (144) 古語拾遺
(145) 本草綱目・瑣碎錄 (149) 井蛙鈔 (150) 論語 (151) 莊子 (152) 新撰和歌六帖 (154) 陳師道が思亭
記 (157) 五雜組 (161) 枕草子 (170) 孟子離婁篇・孟子公孫丑篇 (171) 文段鈔 (173) 大学 (174) 小学
(188) 孟子離婁篇 (194)

○特別語彙。() 内は段数。

ここに「特別語彙」というのは、その使用に於て普通と異り、興味のある読み方をさせたり、著者の思想傾向を見

る上で興味をひくことば等である。

氣便(136) 毛瀾無物の贅太り入大坪注「もみない物の煮え太り」ノコト。マズイ物が煮エルトカエツテ量ガフエルトイウコトカラ、不器量者ガカエツテアタリ構ワズ我儘ノ行動ヲスルコトノ譬。浮世草子『好色敗毒散、一の二』ニ用例アリ「もみない物の煮え太り」とて、恠氣に修羅をもやし、積がおこったというて寝るやら……」V・月の兎入大坪注「藻塩草」卷第十一、兎十四ニモコノ説話ヲ引ク。「貞頭盧説法経」ニ載セル説話。『和歌分類』ニモアリ。『高光集』『宝物集』等ニモ月ノ兎ヲ詠ミコンダ歌アリV(以上137) 耳聽・目辨・堪胡乱者・狸狴・驕驕騮入大坪注「驕」ノ振仮名シハキガ正シイV・丘山・鴟鵂・程明道の一草一木無非吾仁・三箇の頑愚(以上144) 驕驕(145) 陳師道入大坪注「師」ノ振仮名チハシガ正シイ。「思亭記」ハ文段鈔等ニモ引用アリV(157) 和礼家(158) 奴口上(163) 禹王の旨酒を惡み給ひし事入大坪注「孟子離婁篇下ニ「禹ハ惡シテ旨酒ヲ而好シ善言ヲ」トアリ、戦国策卷七魏上ノ惠王ニモ「昔者帝女令儀狄ヲシテ作酒ヲ而美ナリ、進ニ之ヲ禹ニ、禹飲ミテ而甘シ之ヲ、遂ニ疏ニシ儀狄ヲ、絶ニ旨酒ヲ、曰ク、後世必ズ有下ヲ以テ酒ヲ亡ニ其國ノ者上。」トアルV(175) 律の法入大坪注「人倫訓蒙図彙、三ノ馬方」ニ「曲有馬には踏馬と鞍の後に札をつけたるは、是律令の格式なり」トアリV・踏馬御免入大坪注「騎馬者ヤ口取ガ通行人ニ対シソコヲ退ケト合図ニ言ウ語。踏馬ハ人ヲ踏ム癖ノアル馬。芭蕉ノ句合『貝おほひ』十七番判ニ「左のたれも乗たがる馬は、ちとかんよはの、うち氣ものと、しられ侍れは、ふみ馬御免の足本をは、はやく引てのかれ候へかし」トアル。明汗稿筆者ノ奴詞使用ニ注意V(以上183) 公父文伯云々入大坪注「蒙求ノ「文伯羞鼈」ノ話。ソレハ『國語』卷五魯語下ニ記載ノ文伯トソノ母ノ話ト同文デアアルガ、國語ニハ文伯羞鼈ノ他ニモ文伯トソノ母ニ関スル話ガ数話アリ、ソノ中ノ「公父文伯退朝、朝ニ其母ニ、其母方績、文伯曰、以ニ歎之家ニ、而主猶績、懼干ニ季孫之怒」也、其以ニ歎爲レ不能事主乎、其母歎曰、魯其亡乎、使ニ僮子備官、而未ニ之間ニ邪、居

吾語_レ汝、昔聖王之処_レ民也、擇_二瘠土_一而處_レ之勞_二其民_一而用_レ之故長王_二天下_一、夫民勞則思、思則善心生（後略）」
ヲ言ウノデアロウ_▽（184） 土金伝授の場・源義経のミ獨十方に心を賦る云々_△大坪注_一土金ハ頭巾デ『義経記卷
七』ヤ謡曲「安宅」ニ見ユル山伏姿ニ身ヲ変エテ関所ヲ問答シテ辛ウジテ越エル場面ヲ言ウノデアロウカ。源義経
のミ獨云々モ、平家物語や義経記等ヨリノ印象デアロウ、出典未調査_▽（以上187） 表氣の沙汰・法界悋氣_△大坪
注_一芭蕉『貝おほひ』二番ノ句評ニ「右の衆道のうは氣沙汰は先おもひとまりて」トアリ、色恋ニ関スル話や事件
ノコトヲ表氣ノ沙汰トイウ。法界悋氣ハ『皇都午睡』三編中卷「諸品の變名」ニ言ウゴトク、岡焼餅ノコトデ局外
者ガネタムコト、即チ自分ニ無關係ナ事ニ嫉妬スルコトデ、「夕霧阿波鳴渡、中」ニモ用例アリ_▽（以上190）

明汗稿

徒然草奥儀抄四（外題）

徒然草明汗稿 四

△内題▽

百三十五段

資季_{スケスエ}大納言入道とかや聞えける人。具氏_{トモウデノサイシヤウチウジヤウ}宰相中將にあひて。わぬしの問れ_{トハ}ん程の事。何ニ事なりとも答へ申さざら
んやといはれければ。具氏いかゞ侍らん_との申されけるを。さらばあらがひ給へといはれて。はかゞしき事にかたは
しもまねびしり侍らねバ尋ね申までもなし。何となきそゞろごとの中_{ナカ}に。覺束_{オボツカ}なき事をこそ問奉_{トヒ}らめと申されけり。
ましてこゝもとの淺き事ハ。何事なりともあきらめ申さんといはれければ。近習_{キンジウ}の人々女房なども。興_{ケウ}あるあらがひ

也。おなじくハ御前ゴゼンにてあらそはるべし。負マケたらん人ハ供御グゴをまうけらるべしとさぞめて。御前ゴゼンにてめしあはせられたりけるに。具氏おさなくより聞ならひ侍れど其コころしらぬ事侍り。むまのきつりやうきつにのをか。なかくばれいりくれむとうと申事ハ。いかなる心にか侍らん承らんと申されけるに。大納言入道はたとつまりて。これハそごることなれば。いふにもたらずといはれけるを。もとよりふかき道ハしり侍らず。そごるごとをたづね奉らんとさだめ申つと申されければ。大納言入道負マケに成て。所課ショクハいかめしくせられたりけるとぞ

此段過言クハゴンの失シツを記せり。今按するに此オモムキ趣にも似かよひたる事あり。瑯邪代醉編十二に岳柯ケイコウ「程史を引て曰ク 荆公ケイコウ字説ガジセツ波ハ乃シ水之皮ノカハ東坡曰然則滑コツ乃シ水之骨ノホネ 東坡問テ荆公ニ曰ク丞ニ相トツ摘テ微ラ宵ヲ容制ニ作ス某ニ不ニ敢テ知ラ獨恐クハ 毎ニ々ニ牽ニ附スル一ニ學ニ者承風ヲ不レ勝ニ其ノ鑿ニ一ニ姑ニ以ニ犇ニ驪ニ二ニ字ニ言ニ之ニ牛ノ之ノ體ハ壯ニ於ニ鹿ニ鹿之行ハ速ニ於ニ牛ニ今積ニ三ニ爲ニ字ト而其ノ義皆反レ之ニ何ノ也公無ニ以ニ答ニ一ニ 雲笈七籤解ニ智慧ニ云智慧者日ハ中之星也ナリ慧者宜ニ以ニ生ニ生ニ爲ニ急ト也故ニ慧ノ字有下而上生并而共ニ乘ニ一ニ急ニ之象上其ノ穿ニ鑿ニ如レ此 又曰東坡問ニ荆公ニ字ニ說新ニ成ニ戲ニ曰以レ竹鞭ニ馬ニ爲ニ篤ニ以レ竹鞭ニ犬ニ有ニ何ノ可レ笑ニ

百三十六段

くすしあつしげ。故法皇コホウワウの御前ゴゼンにさふらて供御コゴのまいりけるに。今まいり侍る供御コゴの色々イロイロを。文字モジも功能クノリも尋ね下されてそらに申侍らバ。本草ホンサウに御覽ゴランじ合せられ侍れかし。ひとつも申あやまり侍らじと申ける時しも。六条コダイフ故内府コダイフ参り給ひて。有房アリフサつるでに物習モノナリひ侍らんとて。まづしほといふ文字モジハ。いづれの偏ヘンにか侍らんと問トれたりけるに。土偏ヘンに候と申たりければ。才ザエの程既ホドスデにあらはれにたり。今ハさばかりにて候へ。床ユカしき所なしと申されけるに。とよみ

になりてまかり出にけり

前段に同じ 但しほといふ字にハ限らず和漢ともに文字を誤れる事勝て計ふべからず 是によりて唐にも正字の官職あり さて殊に鹽といふ字ハわきて人の誤る字なれば有房公ハよ」き氣便にこそ

百三十七段

花ハ盛りに月ハ隈なきをのミ見る物かは。雨にむかひて月をこひ。たれこめて春の行衛しらぬも猶あはれに情ふかし。咲ぬべきほどの木末。散しほれたる庭などこそ見所おほけれ。哥の詞書にも。花見にまかれりけるにはやく散過にければとも。さハる事ありてまからでなどもかけるハ。花を見てといへるにおとれる事かハ。花のちり月の傾くを慕ふならひハさる事なれど。ことに頑なる人ぞ。此えだ彼枝散にけり。今ハ見どころなしなどハいふめる。萬の事も始終こそおかしけれ。男女の情もひとへに逢見るをばいふ物かハ。』あはでやみにしうさを思ひ。あだなる契りをかこち。長き夜を獨明し遠き雲井をおもひやり。浅茅が宿に昔を忍ぶこそ色好むとハいはめ。望月の隈なきを千里の外までながめたるよりも。暁ちかく成て待出たるがいと心ぶかう青みたるやうにて。ふかき山の杉の梢に見えたる木の間の影。うちしぐれたる村雲がくれの程またなくあはれなり。椎柴しらかしなどのぬれたるやうなる葉のうへにきらめきたるこそ。身にしみて心あらん友もがなと。都こひしく覚ゆれ。すべて月花をばさのミ目にて見る物かは。春ハ家を立さらでも。月の夜ハ閨のうちながらも思へるこそ。いとたのもしくおかしけれ。よき人ハ偏にすけるさまにも見えず。興ずるさまも等閑也。かた田舎の人の〇ぞ色こく萬ハもて興ずれ。花のもとにハねちよりたちより。あからめもせずまもりて酒のミ連歌して。はてハ大なる枝心なく折とりぬ。泉にハ手足さしひたして。雪にはおりた

ちて跡^{アト}つけなど。萬の物よぞな^(ママ)がら見る事なし。さやうの人の祭見^{マツリ}しさいいとめづらかなりき。見^ミごといと遅^{ヲシ}し。其程ハ棧敷^{サンジキフヨウ}不用也とて。おくなる屋^ヤにて酒のみ物くひ。圍碁^{イゴ}双六^{スゴロク}などあそひて。棧敷^{サンジキフヨウ}には人を置^{ヲキ}たれば。わたりさふらふといふ時に。各肝^{ヲノ}つふるやうに。あらそひ走^シりのぼりて。落^{オチ}ぬべきまで簾^{スダレ}はり出^{イデ}て。をしあひつゝ一事^{ヒトコト}も見漏^{ミモラ}さじとまもりて。とありかゝりと物毎^{モノト}にいひて。わたり過^{スギ}ぬれば又わたらむまでといひておりぬ。たゞ物をのミ見んとするなるべし。都^{ミヤコ}の人のゆゝしげなるハ睡^ネりていとも見ず。わかすゑゝなるハ宮^{ミヤ}づかへにたちる。人のうしろにさふらふハさまあしくもをよびかゝらず。わりなく見むとする人もなし。何となく葵^{アヅヒ}かけわたしてなまめかしきに。明^{アケ}はなれぬほど忍びてよする車^{クルマ}どものゆかしきを。それかかれかなと思ひよすれば。牛飼^{ウシカヒシモベ}下部^ベなどの見しれるもあり。おかしくもきらくしくもさまゝく^{ユキ}に行^{ユキ}かふ。見るもつれ」くならず。暮^{クル}るほどにハたてならべつる車^{クルマ}ども。所^{トコロ}なくなみるつる人も。何方^{イツカタ}へか行^{ユキ}つらん程なくまれに成^{ナリ}て。車^{クルマ}どものらうがハしさもすみぬれば。簾^{スダレ}畳^{タタミ}もとりはらひ。目の前にさひしげに成^{ユキ}ゆくこそ。世のためしもおもひしられて哀^{アハレ}なれ。大^{オホ}路^チ見^ミたるこそ祭^{マツリ}ミたるにてハあれ。彼^カ、棧敷^{サンジキフヨウ}の前をこゝら行^{ユキ}かふ人の見しれるが数^{アマタ}多^タあるにてしりぬ。世の人数^{ヒトカズ}もさのミハ多^タからぬにこそ。此^{コノ}人皆^{みな}うせなん後。我身死^シぬべきに定^{サダメ}りたりとも程なく待^{マチ}つけぬべし。大^{オホ}なる器^{ウツハモノ}に水^{ミヅ}を入^{ハク}て。細^{ホソ}き穴^{アナ}をあけたらんに。一滴^{シタビ}事^{コト}すくなしといふとも。怠^{ラコタ}る間^マなく漏^{モリ}ゆかバやがて盡^{ツキ}ぬべし。都^{ミヤコ}の中に多^{オホ}き人。死^シなざる日^ヒハあるべからず。一日^ヒに一人二人^ヒのミならんや。鳥部^{トリ}野舟^{フナフネ}岡^カさらぬ野山^{ノヤマ}にも。送^{オク}る数^{カズ}多^タかる日^ヒハあれどをくらぬ日^ヒハなし。されバ棺^{ヒツキ}を齧^{ヒサ}く者^{モノツク}作りてうちをく程なし。若^{ワカキ}にもよらず強^{ツヨ}きにもよらずおもひかけぬハ死^シ期^キ也。今日^{マデノ}迄^ガ遁^{ニゲ}れ来^キにけるハ有^{アリ}難^{ガタ}き不思議^{フシギ}也。しバしも世をのどかにハ思^{オモ}ひなんや。まゝ子^コだてといふ物を。双六^{スゴロク}の石^{イシ}にて作りてならべたるほどハ。とられん事^{コト}いづれの石^{イシ}ともしらねども。かぞへあてゝひとつをと^ツりぬれば。その外^{ソノ}ハ遁^{ニゲ}れぬと見^ミれど。又々^{タタ}かそふれば。彼^{カノ}是^{コノ}まめきゆくほどに。いづれも遁^{ニゲ}れざるに似^ニたり。兵^{ツハモノ}の軍^{イクサ}に出^{イデ}るハ死^シに近^{チカ}き事^{コト}をしりて。家^{ウチ}をもわすれ身^ミをも忘^{ワス}

る。世を背ける草の庵には「閑に水石を翫びて。是を餘所にきくと思へるはいとはかなし。閑なる山のおく。無常の敵きはひ来らざらんや。其、死に臨める事。軍の陳にすゝめるにおなじ

世間流布の本此段より以下を下巻とす 徹書記物語に見えしごとく此段の最初の文と山吹の清けに藤のおぼつか

なきといふ詞こそ源氏物語枕草子にも劣らね 天晴餘多の塵芥なかりせばといとおし 男女の情も……是等も風流

にこそ 望月の……玉葉集に俊成卿 月清み千里の外に雲つきて都の方に衣うつ也 こゝら行かふ人の……是等莊子

にいへる井中の蛙にしてしかも入はがなる料簡ども笑ふべし」 思ひかけぬハ……兼好が例の後世しり自

慢いやなる事也 涅槃も生死なる事ハしらずや 管子形勝篇に自媒女醜而不信と見えたり 窃竊たる

淑女何そみづから媒せんや 俗に毛瀾無物の贅太りといふも兼好がうへに相應せり

世を長閑に……久安百首に清輔 のどけかれ月の朧よ露の身をやどす草葉の程もなき世に 是ハ人世のはか

なく月日の過行たとへ也 たとへバ廣き野をゆくに虎におはれてふる井の穴に入て 草根にすがりて下を見れば

わにといふ物の口をあきて落なバ喰はんとするけしき也 上にハかの虎」まちかけたり いかゞせんとおもふに黒白

の朧来りてとりつきし草根をくひきらんとす 白き朧ハ日のうつり行にたとへ黒き朧ハ月のゆくにたとへたり 此本

説佛経也 但本経いまた考へず 長伯老人の和歌分類にも此、趣に載られたり 又此、比喻に類似せる事あり

賓頭盧為優陀延王説法經ニ曰 我レ今爲レ王ノ略ノ説ニ譬喩ヲ 王志「心聽昔有レ人行在テ曠路ニ逢ニ大ニ惡ニ象ニ爲レメニ象ノ所レテ

逐フ 狂懼走突ノ無レ所ニ依一怙一見一丘一井一即テ尋ニ樹根一 入ニ井ノ中ニ蔵 上ニ有ニ黒、白ノ二朧一牙ヲ以テ齧ニ樹根一 此ノ

井ノ四邊ニ有ニ四ノ毒蛇ニ欲レ螫ニ其ノ人ヲ而此ノ井ノ下ニ有ニ三ノ大龍ニ畏レ四一蛇ニ下ニハ畏ニ毒ノ龍ノ所レ攀ル之樹ハ其ノ根動揺ス」樹一

上ニ有ニ蜜而一三一滴一墮ニ其ノ口一中ニ 干レ時動レ樹敲ニ壞ニ蜂窠ヲ 衆ニ蜂散飛テ咬ニ螫ニ其ノ人ヲ有ニ野火一起復来テ焼レ樹ヲ大王

當^レ知^ル彼^ノ人^ノ苦^惱不^レ可^ニ稱^{ハカリ}計^一。而^ル彼^ノ人得^レ味^ヲ甚^ニ少^シ苦^惱甚^ニ多^シ。大王曠^野者^ハ喻^フ於^ニ生^一死^ニ彼^ノ男^子者^ハ喻^フ凡^夫象^ハ者^ハ喻^フ於^ニ無^常井^ヲ者^ハ喻^フ人^ノ身^ニ樹^ヲ者^ハ喻^フ人^ノ命^ニ白^黒魚^ハ喻^フ於^ニ昼^夜根^ハ者^ハ喻^フ念^々滅^{スル}ニ四^毒蛇^ハ者^ハ喻^フ於^ニ四大^ニ蜜^ハ者^ハ喻^フ於^ニ五^欲衆^蜂喻^フ惡^覺野^火燒^ハ者^ハ喻^フ其^ノ老^邁下^ニ有^三毒^龍喻^フ其^ノ死^去墮^ニ三^惡道^ニ是^ノ故^ニ當^レ知^欲味^甚少^シ苦^惱甚^ニ多^シ。

百三十八段

祭^{マツリ}すぎぬれバ。後^{ノチ}の葵^{アヅヒ}ふやうなりとて。或^{アル}人^ノの御簾^{ミス}なるを皆とらせられ侍りしが。色もなく「覚え侍りしを。よき人のし給ふ事なればさるべきにやと思ひしかど。周防内侍^{スハウナイシ}がかくれともかひなき物はもろともにミすのあふひの枯葉也けり」とよめるも。母屋^{モヤ}の御簾^{ミス}に葵のかゝりたるかれ葉をよめるよし家集^{イヘノシウ}にかけり。ふるき哥^{コトバ}の詞書^{カキ}にかれたるあふひにさしてつかはしけるとも侍り。枕草子^{マクラサウシ}にもこしかたこひしき物。かれたる葵とかけるこそいみじくなつかしく思ひよいたれ。鴨長明^{カモノチヤウメイ}が四季物語^{キモノガタリ}にも。玉だれに後のあふひハとまりけりとぞかける。をのれとかるゝだにこそあるを。名残^{ナゴリ}なくいかゞとりすつべき。御帳^{ミチャウ}にかゝれる藥玉^{クスダマ}も九月九日菊^{キク}にとりかへらるゝといへバ。さうぶハ菊のおりまでもあるべきに」こそ。枇杷^ヒ皇太后宮^{ハクワウダイコウグウ}かくれ給ひて後。古^{フル}き御帳^{ミチャウ}の内に。さうぶくす玉などのかれたるが侍りけるを見て。おりならぬねを猶そかけつと。弁^{ベン}の乳母^{メノト}のいへる返事^{ヘンシ}に。あやめの草^ハありなからとも。江侍^{エシ}従^{ジウ}がよみしぞかし。

此段古^{ハク}人^{セツ}の迫^{ハク}切^{セツ}ならざるをいへるにや。但^シ長明^カ四季物語^シ四卷^シありと文段鈔^{ブンダンショウ}に記されたれど。此書^{コノシヨ}たえて世になき物なればいぶかし。尤^{モトモト}當^レ世流^{セリウ}布^フする四^シ卷^{クワン}の印^{イン}本^{ホン}ハ偽^ギ作^{サク}の由^ユさだかに承^{ウケタマハ}る。

百三十九段

家にありたき木ハ松マツ桜サクラ。松ハ五ゴ葉ヨウもよし。花ハひとへなるよし。八重桜ハ奈良の都にのみありけるを。此ノ比そ世に多くなり侍る。(ママ)吉野の花左近ササノのさく」ら皆ひとへにてこそあれ。八重桜ハことやうの物也。いとこちたくねぢけたり。うへずともありなん。遅桜又すさまじ。虫のつきたるもむつかし。梅ハ白きうす紅梅コウバイ。ひとへなるがとく咲たるも。かきなりたる紅梅の匂ニホひめでたきもみなおかし。遅き梅ハ桜に咲あひて覚えをとり。けをされて。枝にしほみつきたるころうし。ひとへなるがまづ咲て散たるハ。心とおかしとて。京極ノ入道中納言ハ。猶ひとへ梅をなん軒近く植られたりける。京極の屋ヤの南むきに今も二本侍るめり。柳又おかし卯月ばかりの若楓ワカエデ。すべて萬の花紅葉にも勝りてめでたきもの也。橘桂タチバナカツラいづれも木ハ物ふり大キなるよし。草ハ」山吹藤ヤマブキフヂ杜若ツタズアサガハ撫子池ハチスにハ蓮アキ。秋の草ハ荻フキス薄ハキきちかう。萩女郎花ハギヲミナヘシふぢ袴紫苑ハカマシヨニ。われもかう刈萱カルカヤりんだう。菊キク黄菊キナギも。薦葛朝顔ツタクスアサガハいづれもいと高からず。さゞやかなる垣カキにしげからぬよし。此ノ外世(ママ)に稀なる物。からめきたる名の聞にく。花も見なれぬなどいとなつかしからず。おほかた何もめづらしく有がたき物ハ。よからぬ人のもて興ケウずる物也。さやうの物なくてありなむ

此段又枕草子を摸モせり

百四十段

身死して財残タカラノコる事ハ。智者チシヤのせざる所也。よからぬ物貯タケハへ置たるもつたなく。よき物ハ心をとめけんとはかなし。こちたくおほかるまして口おし。我こそ得エ」めなどいふ者どもありて。跡アトに争アラソひたるさまあし。後ハ誰タレにと志コハロサすものあらバ。いけらんうちにぞ譲ユツるべき。朝夕なくてかなはざらん物こそあらめ。其ノ外ハ何もたでぞあらまほしき

此段唐の故「事」にてかけりと聞えたり

百四十一段

悲田院堯蓮上人ハ。俗姓ハ三浦のなにがしとかやさうなき武者也。故郷の人来りて物がたりすとて。吾妻人こそいひつる事ハたのまるれ。都の人ハことうけのミよくて實なしといひしを。ひじりそれハさこそおぼすらめども。をのれハ都に久く住て馴て見侍るに。人の心をとれりとハ思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆへに。人のいふほどの事けやけくいなひが」たく。萬えいひはなたず。心よハくことうけしつ 偽せんとは思はねど。乏くかなはぬ人のミあれバ。をのづからほい通らぬ事多かるべし。あづま人ハ我方なれど。げにハ心の色なく情をくれ。ひとへにすぐよかなるものなれバ。始めよりいなといひてやみぬ。賑ひ豊なれバ人にハたのまるゝぞかしと。ことはられ侍りしこそ。此ひじり聲うちゆがみあらゝしくて。聖教のこまやかなることハリ。いとわきまへずもやと思ひしに。此一言の後心にくゝなりて。おほかる中に寺をも住持せらるゝハ。かくやはらぎたる所ありて。其益もあるにこそと覚え侍りし

此段堯蓮上人のよき合点にしてさハラぬ返「答」也 但「都」鄙各一かたに論ぜんハいかゞ

百四十二段

心なしと見ゆる者も。よき一言いふもの也。ある荒夷の恐しげなるがかたへにあひて。御子ハおはすやと問しに。ひとりもゝち侍らずと答へしかバ。さてハ物のあはれハしり給はじ。情なき御心にぞものし給らんといとをそろし。子

ゆへにこそ萬マンのあはれハ思ひしらるれといひたりし。さもありぬべき事也。恩愛オンアイの道ならでハ。かゝる者の心に慈悲ヒありなんや。孝養カウヤウの心なき者も。子もちてこそ親コトの志ハ思ひしるなれ。世を捨ステたる人の萬マンに匹スル如スミ身なるが。なべてほだしおほかる人の。萬マンに諂ヘツラ望ノシみふかきを見て。無下ムゲに思ひくだすハ僻事也。其コノ人の心になりておもへバ。誠に悲カナしからん。親のため妻子サイシのためにハ。恥ハヂをも忘れぬすみしつべき事也。されバ盗ヌス人ヲをいましめひがことをのミつミせんよりハ。世の人の餓ウヘず寒サムからぬやうに。世をバおこなはまほしきなり。人恒ツネの産サンなき時ハ恒ツネの心なし。人窮キハまりてぬすミす。世おさまらずして凍餒トウタイのくるしみあらバ。とがの者絶タツべからず。人をくるしめ法ホウを犯オカさしめて。それをつみなハん事不便フビンのわざなり。さていかゞして人を恵メグむべきとならバ。上の驕カミりオゴついやす所をやめ。民タミをなで農ノウをすゝめバ。下に利あらん事うたがひあるべからず衣食尋常なるうへに僻事ヒガせん人をぞ。まことの盗人ノウとハいふべき」

此段殊勝レヌスミスのあらまし也　されバ……孟子を以てかけり　又礼記坊記に　子コ曰マツ小人貧マツギキナ　斯約富コレセハクシトメル寸ハ　斯驕約レオゴルシケレバ

百四十三段

人の終焉シウエンのありさまの。いミじかりし事など人の語るを聞キクに。たゞ閑シツカにしてミだれずといハハ心にくかるべきを。愚ヨロカなる人ハあやしく異コトなる相サウをかたりつけ。いひし詞コトバもふるまひも。己ヲノレが好コノむかたにほめなすこそ。其ヒ人の日來ヒゴロの本意ホにもあらずやと覺イゆれ。此大事ハ権化ゴンケの人ノもさだむべからず。博學ハクガクの士シもはかるべからず。をのれたがふ所なくハ。人の見聞ケンブンにハよるべからず

此段ハ兼好料簡の通りにや 此大事ハ……文段鈔に此所問一答を設けられたれど共に心得がたし 上よりの文を見下し侍るに是ハ世話にいふ臨終正念なりし或ヒハとり乱されしなどいふ事ならむか 肉身なれハ病あるによりてよき人の臨終苦々しきも有べし されバ火の車にて迎に來べき人といへど曾其沙汰のなきがあるをいへるにやと覺ゆ

百四十四段

梅尾の上人達を過給ひけるに。河にて馬あらふおのこ。あし／＼といひければ。上人たちとまりて。あなたふとや宿執開發の人哉。阿字／＼と唱るぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるハと尋ね給ひければ。府生殿の御馬に候と答へけり。こはめでたき事哉。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつる哉とて。感涙を拭はれけるとぞ

此段性空が六根淨と同じ 明惠筆て耳辟めり されバ耳聽こそ正しからずとも目辨はいかにぞや 性空明惠共に俗にいふ堪胡乱者也 又阿字をたつるうへよりいハ物々各々阿字あるべし 夫鼠を捕る事ハ狸に如ざれども 日に千里を馳るは騏驎驪の阿字 晝出て目を眩せども丘山を見ざるも 夜ハ蚊を操り毫末を察するハ鴟鵂の阿字也 糞の五穀を滋し土の民を養ふ是糞土の阿字也 明惠が如き者ハ糞をも阿字と聞なバ則舐りこそせめといとおかし しかるを浅香氏の諸鈔大成に此類とて彼是あまた引出して「称美し 剩孟子離婁篇を引て 有孺子一歌曰滄浪之水清兮可三以濯我纓 滄浪之水濁兮可三以濯我足」孔子曰小子聴之清斯濯纓濁斯濯足矣 とあるを用ひられたれどいかゞにや 是ハ先いはゞ邦道あると道なき時をはかり 時に處する聖人の教へにして孔夫子聊黒き事を白きとも聴給ハざる事分明也 又程明道の「草一木無非」云フ 吾仁といへ

るも天、地陰陽造化にひとしき仁徳いかなぞ。秋毫の末にも至らざるべき理の當然にして、いづれも此段のうろたへ者とハ同日の論にあらじ。是を信ずる兼好ハいふに及ばず。性空明恵を合せ三箇の頑愚として三箇の大事に相對してん。暫く彼等に与しておもへば此世にてさへかくまで迷ふをさて、後世の心もとなき法師どもにこそありけれ。

百四十五段

御隨身秦重躬。北面の下野入道信願を。落馬の相ある人也。能く慎み給へといひけるを。いとまことしからず思ひけるに。行願馬より落て死にけり。道に長じぬる一言神のごとしと人おもへり。さていかなる相ぞと人の問ければ。極めて桃尻にして。沛艾の馬を好みしかば。此相をおほせ侍りき。いつかハ申誤りたるとぞいひける。

此段人相の見やう其理にあたれり。秦氏の事ハ諸鈔に見えたれどいまだ秦の訓義を辨ぜず。古語拾遺の註に云所貢絹綿軟ニ於肌膚一訓ニ秦ノ字ヲ謂フ之波陀一と見えたり。是ハ廿二代雄略天皇の御字に秦酒公といひし人。絹綿を献れるより賞給ひて賜へるの姓也。沛艾の二字馬行兒との字註なれば此趣にハあひがたかるべし。兼好が文旨にて訓点ばかりによれる也。驕騰の字などや親しからん。

百四十六段

明雲座主相者に逢給ひて。をのれ若兵仗の難やあなと尋ね給ひければ。相人誠に其相おハしますと申。いかなる相ぞと尋ね給ひければ。傷害の恐れおハしますまじき御身にて。假にもかくおぼしよりてたづね給ふ。是既に其

あやぶみのきざしなりと申けり。果して矢に中りてうせ給ひにけり

前段に同じ 但前段ハ形體此ノ段ハ意志によれり」

百四十七段

灸治あまた所に成ぬれば。神事にけがれありといふ事。近く人のいひ出せる也。格式等にもミえずとぞ

灸治をいむなどハ一宮一社の格例一様ならず

百四十八段

四十以後の人。身に灸を加へて三里をやかざれば上氣の事あり。必灸すべし

三里の灸ハ五勞七傷を補助するの灸穴也

百四十九段

鹿茸を鼻にあてゝ嗅べからず。ちいさき虫ありて。鼻より入て脳をはむといへり

本草綱目瑣碎録等の説にして 末書にも出たる事也

百五十段

能^{ノウ}をつがんとする人。よくせざらんほどハ。怒^{ナマシヒ}に人にしられじ。うちよく習^{ナラ}ひえて。さし出たらんこ」そ。いと心にくからめと常にいふめれど。かくいふ人一^{ゲイ}藝^{マヤ}もならひうる事なし。いまだ堅固^{ケンゴ}かたほなるより上手^{ジャウズ}の中にまじりて。そしり笑^{ワラ}はるゝにも恥^{ハヂ}ず。強面^{ツレナ}く過^{スギ}てたしなむ人。天性^{テンセイ}其^{コソ}骨^{コツ}なけれども。道^{ミチ}に泥^{ナツ}まず猥^{ミダリ}にせずして年^{トシ}を送^{ワク}れバ。堪能^{カンノウ}のたしなまざるよりハ。終^{ツキ}に上手^{クラキ}の位^イにいたり。徳^{トク}たけ人にゆるされて。ならびなき名^ナをうる事也。天下^{アマガシタ}のものゝ上手といへども。はじめハ不堪^{フカン}の聞^{キコ}えもあり。無下^{ムゲ}の瑕^{カキン}瑾^{キン}もありき。されども其^ナ人道^{ニョウドウ}のをきて正^{タシ}しく。これを重^{オモ}くして放埒^{ハウラシ}せざれば。世^ヨのはかせにて萬人^{マンニン}の師^シとなる事。諸道^{ショウドウ}かはるべからず

天下の……為^{タメイヘン}家卿^{ケイキョウ}廿五歳^{ニジュゴサイ}までハ哥^カの不^フ堪^{カン}にして父^フ祖^ソの跡^{アト}を續^{ツギ}で世^ヨにまじらひても詮^{セン}なし出家^{シュツカ}せんと思^{オモ}ひ給^{キヨ}ひしかど 慈鎮^{ジチン}和尚^{イサ}の諫^{イサ}めによりて五日^{ゴニチ}に千首^{センシュ}を詠^{エイ}じ それより次第^{シヤウジ}に長^{チヤウ}じて道^{ミチ}の宗^{ソウ}匠^{シヤウ}となり父^フ祖^ソのあとを興^{オコ}されけるよし井蛙^{ケハ}鈔^{セウ}に委^{タカヒ}し 此^{コノ}類^{ルイ}いくらも侍^{サマヘ}るべし

百五十一段

或人^{イハク}の云^{トシ}。年五十^{ニジュウゴ}になるまで。上手^{ウツ}に至^シらざるむ藝^{ゲイ}をバ捨^{スツ}べきなり。勵^{ハゲ}みならふべき行^{ユキ}末^{マツ}もなし。老^{ロウ}人の事^{コト}をバ人もえわらはず。衆^{シュ}にまじりたるもあいなく見^ミぐるし。おほかた萬^{マン}のしわざハやめて。暇^{イダ}あるこそめやすくあらまほしけれ。世^セ俗^{ゾク}の事^{コト}にたづさハリて。生涯^{シヤウガイ}をくらすハ下愚^{カゲ}の人也。ゆかしく覺^{サト}えむ事^{コト}ハ学^{マナ}びきくとも。其^{オモムキ}趣^{ソウ}をしりなバおぼつかかなからずしてやむべし。もとより望^{ノゾミ}む事^{コト}なくしてやまんハ第一^{ダイイチ}の事也

此段論語をもととせり

百五十二段

西大寺静然上人。腰かゞまり眉しろく。誠に徳たけたるありさまにて。内裏へ参られたりけるに。西園寺内大臣殿あなたふとのけしきやとて。信仰のきそくありければ。資朝卿これを見て。年のよりたるに候と申されけり。後日にむく犬の老髯ひて毛はげたるをひかせて。此ノ氣色たふとく見えて候とて。内府へまいらせられたりけるとぞ。』

此段資朝卿の識量を記せり。いかさま外容に拘りて賢不肖を慮るに至らず。凡庸の人のあらまし也。莊子がいへると少意ハたがひぬれども。周公の服を猿に著たる類ハ世に多きもの也。

百五十三段

為兼大納言入道めしとられて。武士どもうちかこみて。六波羅へゐて行ければ資朝ノ卿一条わたりにて是を見てあなうらやまし。世にあらん思ひ出。かくこそあらまほしけれとぞいはれける。

此段も資朝卿拔群の器量なりしを記せり。天下に知らるゝ程の悪事ハ凡常の人の為べき業にあらず。

百五十四段

此人東寺の門に。雨やどりをせられたりけるに。かた」わ者共の集りゐたるが。手も足もねぢゆがみうちかへりて。

いづくも不具^{フグ}にことやうなるを見て。とり／＼にたぐひなき曲者^{クセモノ}也。尤^{モットモアイ}愛するにたれりと思ひてまもり給ひけるほどに。やがて其^{ケウ}興つきて。見にく／＼いぶせく覚えければ。たぐ^{スナホ}朴にめづらしからぬ物にハしかずと思ひて。歸^{カヘ}りて後此^{ノチ}ノ間^{アヒダ}うへ木を好^キみて。ことやうに曲折あるを求めて。目を悦^{ヨロコ}ばしめつるハ。彼^カ、かたわを愛^{アイ}する也けりと興なく覚えければ。鉢^{ハチ}に植^{ウヅ}られける木ども。皆ほりすてられにけり。さもありぬべき事也

此段亦資朝卿の事跡 資朝卿ハ氣象^{キシヤウ}の珍^{メツ}らしき人にこそ 雨やどり 新六帖^{ノフザネ}に信實^{シンジツ} 雨やどりしバしと思へバ道の辺の空くもりする夕立の雲

百五十五段

世にしたがはん人ハ。まづ機嫌^{キゲン}をしるべし。つゐであしき事ハ人の耳^{ミミ}にもさかひ。心にもたがひて其事ならず。さやうの折^{フリ}ふしを心得^{コハロウ}べき也。但^シ病をうけ子うみ死ぬる事ノミ機嫌をはからず。つゐであしとて止事^{ヤム}なし。生住異滅^{シヤウヂウイメツ}のうつりかハる実^{マコト}の大事ハ。たけき河^{カハ}の漲^{ミナギ}り流るゝが如^{ゴト}し。しバしも滞^{トシコホ}らず直^{タラシ}に行^イひゆくもの也。されバ真俗^{シンゾク}につけて。必^{ハタ}果^{トゲ}し遂^{ツグ}んと思はん事ハ機嫌をいふべからず。とかくの用^{ヨウ}意^イなく足を踏^{フミ}とぐむまじき也。春^{ハル}くれて夏^{ナツ}になり。夏^{ナツ}はてて秋^{アキ}のくるにハあらず。春^{ハル}ハ夏^{ナツ}の氣^キをもよほし。夏よりすでに秋^{アキ}ハ秋^{アキ}の氣^キをもよほし。秋^{アキ}は則^{スナハチ}寒^{サム}くなり。十月ハ「小春^{コハル}の天氣^{テンキ}。草^{クサ}も青^{アヲ}くなり梅^{ウメ}もつばみぬ。木^キの葉^ハの落^{オツ}るもまづ落^{オツ}てめぐむにハあらず。下^{シタ}よりきざしつはるに堪^{タヘ}ずして落^{オツ}るなり。迎^{ムカ}ふる氣^キ下にまふけたるゆへに。まちとるつゐで甚^{シヤウラウヒヤウシ}はやし。生老病死^{シヤウラウヒヤウシ}のうつり来る事又是^{シタ}に過^{スギ}たり。四季^{シキ}ハ猶^{サダマ}定^マまれる序^シあり。死期^{シキゴ}ハつゐでをまたず。死^シハ前^{マヘ}よりしも来^{キタ}らず。かねて後^{ウシロ}に迫^{セマ}り。人^{ミナシ}皆死あることを知^{シリ}て。待^{マツ}ことしかも急^{キウ}ならざるに覺^{サト}えずして来^{キタ}る。沖^{オキ}の干瀉^{ヒカタ}はるかなれども。磯^{イシ}より汐^{シホ}の満^{ミツ}るがごとし

此段又生死事大無常迅速を催促せり

(ママ、六ノ誤)
百五十五段

大臣の大饗ハ。さるべき所を申うけて行ふ常の事也。宇治ノ左大臣殿ハ東三条殿にてをこなハる。内ノ裏にてありけるを申されけるによりて。他所へ行幸ありける。させることのよせなけれども。女院の御所などかり申故実也とぞ

此段故実也

百五十七段

筆をとれバ物かゝれ。樂器をとれバ音をたてんと思ふ。盃とれバ酒をおもひ。賽をとれバ攤うたん事を思ふ。心ハ必ス事にふれて来る。かりにも不善の戯をなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば。何となく前後の文も見ゆ。卒尔にして多年の非を改むる事もあり。かりに今此文をひろげざらましかバ。此事をしらんや。是則ふる所の益也。心更に起らずとも。佛前にありて。珠數をすり經をとらバ。怠るうちにも善業をつかから修せられ。散乱の心ながらも縄牀に座せバ。覚えずして禪定なるべし。事理もとより二ならず。外相もし背かざれば内證必熟す。しるて不信といふべからず。あふぎて是をたふとふへし

此段の最初陳師道が思亭記をとりて心ハ縁にひかれて移る物なればといふの意也。覚えずして……兼好元より毛頭も禪定の意味をしれる者にハあらず。若何れの道なりとも我心に得る所あらハ何ぞ渠がごとく死を恐れんや。外

相も……かくいふ心ならハなどか 本朝の國風にして不吉の例を忌憚る慎の心を嘲りしや すべて如レニ此ノ口のそ
るえぬ事のみこそ」

百五十八段

盃のそこをすつる事ハ。いかゞ心得たると或人の尋ねさせ給ひしに。凝當と申侍るハ。底に凝たるを捨るにや候らんと申侍りしかハさにハあらず魚道也。流れを残して。口のつきたる所を滌也とぞ仰せられし

此段予が思ふに凝當魚道いづれも理あり 好む所に従ふべくや されど和禮家のいふ所ハ魚道とぞ

百五十九段

みなむすびといふハ。糸を結びかさねたるが。蜷といふ貝に似たればいふと。あるやんごとなき人仰せられき。にな
といふは誤り也

此段みなとなとの分辨也

百六十段

門に額かくるを。うつといふハよからぬにや。勘解由小路二品禪門ハ。額かくるとの給ひき。見物の棧敷うつもよ
か」らぬにや。ひらばりうつなどハ常の事也。棧敷構ふるなといふべし。護摩たくといふもわるし。修する護摩す

るなどいふ也。行法ギヤウボウも法の字を清スミていふわろし。濁ニゴりていふと清閑寺僧セイガンジノ正仰せられき。常にいふ事にかゝる事のミ多し

兼好年長タケるまでは是ばかりの事をしらざりけるにや

百六十一段

花のさかりハ。冬至トウジより百五十日とも。時正ジシヤウの後七日ともいへど。立春リツシュンより七十五日おほやうたがハズ

別ベツの事もなくや 五雜組卷二ニ曰 二十四番花信風ト云者ハ自ニ小寒ニ至マテ穀雨ニ凡テ四月八氣二十四候毎候五日以ニ三ニ一花之風信應レス之小寒ニハ一候梅花二候山茶三候水仙 大寒ニハ一候瑞香二候蘭花三候山礬 立春一候迎春二候櫻桃三候望春雨水ニハ一候菜花二候杏花三候李花 驚蟄ニハ一候桃花二候棣棠三候薔薇 春分ニハ一候海棠二候梨花三候木蘭 清明ニハ一候桐花二候麥花三候柳花 穀雨ニハ一候牡丹二候酴醾三候棟花 過レ此ヲ則チ立春也矣 然モ亦舉ニ其大意ヲ耳 其先後之序固ニ亦不能ハ盡ニ定一也

百六十二段

遍昭寺ヘンジャウジの承仕法師ジャウジ。池の鳥を日来飼ヒゴロカヒつけて。堂ドウのうちまで餌エを蒔マキて戸ひとつを開たれば。数カズもしらず入こもりける後(ママ)。をのれも入てたてこめて捕トラへつゝ。殺コロしけるよそほひ。おどろくして聞えけるを。草ワラハキかる童聞て人に告ツケけれバ。村ムラの男共オノコドモおこりて入てみるに。大鴈オホガンどもふためきあへる中に。法師まじりて打ふせねち殺しければ。此法師を捕

へて。所より」使廳へ出したりけり。殺す所の鳥を頸にかけさせて禁獄せられにけり。基俊大納言別當の時になん侍りける

此段法師の爲まじき悪行也と思ひて記せるにや 兼好其身僧なればさこそ覚えて痛ましからめ 但兼好も僧俗別に見たる甚おかし 當世も僧とだにいへば人皆佛とやらんのやうに心得て敬ふ 其身も自然におもひあがりて釋氏の服をだに著しぬれば 羊のごとき輩も一席の座上に跋扈たり さて又行狀あしきとてあるまじき事にいふハ面々の了解ちがひ也 僧俗共に人によるべし容によるべからず 出家とても何の別かある 髪を刺三衣を懸たるばかりにて裸に成バ糸鬢の男も似たるもの也 心頭何ぞ俗に異らん 食欲瞋恚愚癡好色の俗に勝れる族間多し

百六十三段

太衝の太の字点うつたずと云事。陰陽のともがら相論の事ありけり。もりちか入道申侍りしハ。吉平が自筆の占文の裏にかゝれたる御記。近衛関白殿にあり。点うちたるを書たりと申き

此段月の異名と灸穴とに太衝ありて太の字点うつたぬを辨じたり 但和朝醫家の傳習によりてかゝること多きゆへ紛れざらしめんが為に 灸穴の讀曲清濁を別に設けたるもあり 又月の異名を書ハ唐の書にもをしなへてハ見えぬにや 物にもよるべけれど 本朝普通の書面に異名などかくハ奴口上の類にて和礼家に嫌ふ事とぞ

百六十四段

世の人あひあふ時。しばらくも黙止する事なし必^{コトバ}辭あり。其ノ事をきくにおほくハ無益^{ムヤク}の談也。世間の浮説^{フセツ}人の是非^{ゼヒ}。自他の為^{ジタ}に失多く得^{トク}すくなし。是を語る時互^{タガヒ}の心に無益の事也といふことをしらず

此段人と對^{タイ}して無益の談をなすを天下に兼好一人合点^{ガテン}したると也。自贊毀^{ジサンキ}他こそ無益なれ。其外にハ又無用の用もぞあるべきをや

百六十五段

あづまの人の都^{ミヤコ}の人に交^{マジハ}り。都の人の吾妻^{アソマ}に行て身をたて。又本寺^{ホンジ}本山^{ホンザン}をはなれぬる顕密^{ケンミツ}の僧^{サウ}。すべて我族^{ワガゾク}にあらずして人にまじハれる。見ぐるし

此段僧ハさる事にもや。然れども一概^{ガイ}にハいハれまじ

百六十七段 (ママ、六ノ誤)

人間のいとなみあへる業^{ワザ}を見るに。春の日に雪佛^{ユキボトケ}を「作りて。其ために金銀珠玉^{シユギヨク}の飾^{カザ}りを宮^{イトナ}ミ。堂塔^{ドウタク}をたてんとするに似^ニたり。其かまへをまちてよく安置^{アンシヤ}してんや。人の命^{イノチ}ありと見るほども。下^{シタ}より消^{キユ}る事雪^{ユキ}の如^{ゴト}くなるうちに。いとなみまつ事甚^タ多し

此段後「世菩提を勧むるにハよき譬にして 兼好がごとき先も見えぬ後世ねがふ者のありさまハ是より増りてはかな
き事諭ふべ〇によしなし

(ママ、七ノ誤)
百六十八段

一道にたづさハる。人あらぬ道の席に臨みて。あはれ我道ならましかハ。かく餘所に見侍らじ物をといひ。心にも思
へる事常の事なれど。よにわろく覚ゆる也。しらぬ道の羨しくおぼえバ。あなうらやまし。などかならハざりけんと
いひてありなん。我智をとり」出て人にあらそふハ。角ある物の角をかたぶけ。牙あるものゝ牙をかみ出すたぐひ
なり。人として善に伐らず物とあらそハざるを徳とす。他に勝る事のあるハ大キなる失也。品の高さにても。才藝の
すぐれたるにても。先祖の誉れにても。人に勝れりと思へる人ハ。たとひ詞に出てこそいハねとも。内心に若干のと
があり。慎みて是を忘るべし。嗚呼にも見え人にもいひけたれ禍を招くハたゞ此慢心也。一道にも誠に長じぬる人ハ
ミづから明らかに其、非を知ゆへに。志、常に満ずして。終に物にほこる事なし

此段ハ凡庸の人によき誠め也 但他に勝る事のあるハ大なる失也といへるハ中一人以下にハ甚あしき教」にこそ
人に生れて人に勝らんの志、なくハ誰か自励まんや 又昔より人に用ひられし人ハ皆人に勝れる人にあらずや

百六十八段

年老たる人の。一事すぐれたる才能ありて。此人の後にハ誰にかとハんなどいはるゝハ。老のかたうどにていける
もいたづらならず。さハあれど。それもすたれたる所のなきハ。一生此、事にて暮にけりと拙く見ゆ。今ハわすれに

けりといひてありなん。大かたハしりたりとも。すぐろにいひちらすハ。さばかりの才ザエにハあらぬにやと聞え。をのづからあやまりもありぬべし。さだかにも辨ワキマへしらずなどいひたるハ。猶實マコトに道の主アルジとも覚えぬべし。ましてしらぬ事したりかほに。をとなくも」どきぬべくもあらぬ人のいひきかするを。さもあらすと思ひながら聞たる。いとわびし

前段に同じくしかも尤にこそ

百六十九段

何事ナニゴトの式シキといふ事ハ。後嵯峨ゴサガの御代ミヨまでハいはざりけるを。近きほどよりいふ詞也コトバと人の申侍りしに。建礼門院ケンレイモンインの右京大夫ウキヤウノダイフ。後鳥羽院ゴトハの御位ミクラキの後。又うちずみしたる事をいふに。世のしきもかはりたる事ハなきにもと書カキたり

別義もなし

百七十段

さしたる事なくて。人のがりゆくハよからぬ事也。用ありて行ユキたりとも。其事コトはてなバとく歸カヘるべし。久く居キたるいとむつかし。人とむかひたれば詞コトバおほく身もくたびれ」心も閑シヅカならず。萬の事マンノコトさはりて時をうつす。互タガヒのため益エキなし。いとはしげにいハんもわろし。心づきなき事あらんおりハ。中ナカくその由ヨシをいひてん。同じ心ココロにむかハまほしく思はん人の。つれづれにて今しバし。今日ハ心閑ココロシヅカになどいハむハ。此かぎりココノハカリにハあらざるべし。阮籍ゲンセキが青アヲき眼マナコ誰タレ

もあるべき事也。其、事となきに人の来りて。のどかに物語りしてかへりぬるいとよし。又文も久く聞えさせねばなどばかりいひをこせたる。いとうれし

此段枕草子にくき物にいひたる條を委しく注釋したる也

百七十一段

貝をおほふ人の。我まへなるをバをきて。餘所を見わたして。人の袖のかげ膝の下まで目を配る間に。前なるをバ他におほはれぬ。よくおほふ人ハ。よそまでわりなくと」とハ見えずして。近きばかりおほふやうなれど。多く覆ふ也。碁盤の隅に石をたてゝ弾くに。むかひなる石を守りてはじくハ中らず。我手もとをよく見て。こゝなる聖目をすぐにはじけバ。たてたる石必あたる。萬の事外にむきて求むへからず。たゞこゝもとを正しくすべし。清献公が詞に。好事を行じて前程を問ことなかれといへり。世を保たん道もかくや侍らん。内をつゝしまず。軽くほしきまゝにしてみだりなれバ。遠國必そむくとき。はじめてはかりことを求む。風にあたり濕に臥て。病を神靈にうたふるハ愚なる人也と。醫書にいへるがごとし。目の前なる人の愁をやめ。恵ミを施し道を正しくせば。其、化遠く流れん事をしらざる也。禹のゆ」きて三苗を征せしも。師を班して徳をしくにハしかざりき

此段のはじめ孟子離婁篇に 道在爾而求諸遠一事在易而求諸難といへるに近し 其化遠く……同公孫丑篇に 孔子ノ曰徳之流行スルコト速ニ於置郵而傳ルヨリ命ラ

百七十二段

若き時ハ血氣うちにあまり。心物に動きて情欲多し。身をあやぶめてくだけやすき事。珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて財を費し。是を捨て苔の袂にやつれ。いさめる心さかりにして物とあらそひ。心に恥うらやみ。好む所日々にさだまらず。色に耽り情にめで。行ひを潔くして百年の身を誤り。命を失へるためしねがハしくして。身の全く久しからむことをバ思はず。好る方に心ひきて。ながき世がた」りともなる。身をあやまつ事ハ若き時のしわざ也。老ぬる人ハ精神衰へ。淡く疎にして感じ動く所なし。心をのづから閑なれば無益の業をなさず。身をたすけて愁へなく。人の累なからん事を思ふ。老て智のわかき時に勝れる事。わかしくして貌の老たるに勝れるがごとし

此段凡庸の少年にハよき誠めにこそ 但老ぬる人ハといふ以下一概にハいひがたし 凡ッ酔て生れ生ハ涯全く醒ざるも世に多きもの也

百七十三段

小野の小町が事きはめてさだかならず。衰へたるさまハ玉造といふ文に見えたり。此ノ文清行が書りといふ説あれど。高野大師の御作の目録にいれり。大師ハ承和」の始にかくれ給へり。小町がさかりなる事其後の事にや。猶おぼつかなし

小町が事ハ細川幽斎翁の説以下諸書を考へて文段鈔に詳なれば省きぬ 但玉造といふ書ハ空海の弟子仁海の作のよし也 凡ッ名たゝる人の父祖慥ならざる 小町にハ限るべからず 但兼好も知極めぬ事を一ヶ条として如ッ

此ばかりいひたればとて何の用ぞや

百七十四段

小鷹コタカによき犬イヌ大鷹オホタカにつかひぬれば。小鷹にわろくなるといふ。大ダイにつき小セウをすつことはり。誠マコトにしかない。人ニン事ジおほかる中に。道ミチを樂タノシむより氣味キミふかきハなし。是レ實マコトの大事ダイジなり。一たび道ミチを聞キて是レにこゝろざゝむ人いづれのわざかすたれざらん。何事ナニコトをかいとな「まん。愚なる人といふとも。賢カンコき犬の心に劣ワトらんや

此一段大学に 子曰子曰於レ止ニ 知ル其ノ所ヲ止ル可ニ人ニシテ 而不如カ鳥ニ乎ヤといふを用ゆ 但道ミチを樂タノシむ……兼好馬糞バフンを糞ジツに小豆餅ツキモチと思オモへるハ是ゼヒ非ヒなく不レ便ビながら己ミ喰クひあまりて他ヒトに与アタへんとするがおかし

百七十五段

世にハこゝろえぬ事の多きなり。ともあるごとに○まづ酒サケを勸スめて。しる飲ノムせたるを興ケウとする事。いかなる故ユヘともこゝろえず。飲人ノムヒトの顔カホいと堪タヘがたげに眉マユをひそめ人めをハかりて捨スんとし。逃ニゲんとするを捕トラへてひきとどめて。すぐろに飲ノムせつれば。うるはしき人も忽タチマチに狂人キヤウジンとなりて。をこがましく。息災ソクサイなる人も目の前に大事ヒヤウジヤの病者ビヤウシヤとなりて。前後ゼンゴもしらずたふれふす。祝イハふ「べき日などハ。浅アサましかりぬべし。明アカる日まで頭カシラいたく物くはず。呻吟ニヨヒふし。生シヤウをへだてたるやうにして昨日キノの事覚サトえず。おほやけわたくしの大事ダイジをかきてわづらひとなる。人をしてかゝるめを見する事。慈悲ジヒもなく礼義レイギにもそむけり。かくからきめにあひたらん人。ねたくくちおしと思オモはざらんや。他ヒトの國クニにかゝるならひあなりと。これらになき人事ニンジにて傳ツクへ聞キたらんハ。あやしく不思議フシギにおぼえぬべし。人のうへにて見る

だに心うし。思ひ入たるさまに心にくしと見し人も。おもふ所なく笑ひのゝしり。詞多く烏帽子ゆがみ。紐はづし。脛高く褰ハキげてよういなきけしき。日來の人とも覚えず。女ハ額髪はれらかにかきやり。まばゆヒタヒガミ」からず。顔うちさカホげてうちわらひ。盃もてる手にとりつき。よからぬ人ハさかなとりて口にさしあて。ミづからもくひたるさまあし。声のかぎり出してをのゝうたひ。年老たる法師のめし出されて。黒くきたなき身を袒カタクぎて。目もあてられずすりたるを。興ケウじ見る人さへうとましくにくし。あるハ又我身いミじき事ども。かたハらいたくいひきかせ。あるハ醉泣エヒナキし。下シモさまの人は罵ノリあひいさかひて。浅ましくをそろし。恥がましく心うき事のみありて。はてハゆるさぬものどもをしとりて。縁エンより落馬車より落てあやまちしつ。物にものらぬきは。大路をよるばひゆきて。ついびち門の下などにむきて。えもいハぬ事どもしちらし。年おひ袈裟ケサ」かけたる法師の。小童の肩を押へて。聞えぬことゝもいひつゝ。よろめきたるいとかはゆし。かゝる事をして。此ノ世も後の世も益あるべきわざならバいかゞハせん。此世にてハ過おほく財を失ひ病をまうく。百薬の長とはいへど。萬の病ハ酒よりこそおこれ。憂をわするといへど。醉たる人ぞ過スギにしようさも思ひ出でなくめる。後の世は人の智慧をうしなひ。善根をやく事ハ火のごとくして惡をまし。萬の戒をやぶりて地獄に墮オツべし。酒をとりて人に飲せたる人。五百生か間手なき者に生ゝところ佛ハ説給ふなれ。かくうとましと思ふ物なれど。をのづから捨がたき折も有べし。月の夜雪の朝花のもとにても。心長閑に物語して」盃出したる。萬の興をそふるわざ也。つれづれなる日思ひの外に友の入り来て。とりをこなひたるも心慰む。なれ／＼しからぬあたりの御簾の中より。御くだ物ミきなど。よきやうなるけはひしてさし出されたいとよし。冬狭き所にて火にて物いりなどして。へだてなきどち。さしむかひておほく飲たるとおかし。旅のかりや野山などにて。御さかな何などいひて。芝の上にて飲たるもおかし。いたくいたむ人の。強られて少飲たるもいとよし。よき人のとりわきて。今ひとつ上すくなしなどの給はせたるもうれし。ちかづかまほしき人の。上戸にてひし／＼と馴ぬる又嬉し。

さはいへど上戸ハおかしく罪ゆるさるゝものなり。酔くたび」れて朝ゐしたる處を。あるじの引あけたるにまどひて
ほれたる顔ながら。細きもとどりさし出し。物もきあへずいだきもち。ひきしろひてにぐるかいどりすがたのうしろ
手。毛おひたる細脛の程。おかしくつき／＼し
(濁点ママ)

此段酒を嗜む事を甚誠めて 次に又うとまれぬ物の由を述たり 尤理あり されど是非の長談義無益の事也 前
にいひしごとく上戸ハいかにも飲たるがよし下戸にハいましむべし 禹王の旨酒を惡み給ひし事諸鈔に見えたれハ
略す 後の世ハ人の智慧を……後世にも智惠善根の入事と見えたり さて／＼兼好ハよくしれる者也 後世にて
智惠善根のいる事さしも口利の釋迦の説法にもあるまじくや」五百生か間手なき者……かゝる事ならバ今の世にハ
千人が九百九十九人までも手なき者にてあるべけれども万人に一人ありやなしや見たる事もなし 是にて經説の
大偽をしりて又酒をほめたるにや 酔くたびれて……以下放埒至極のありさま何としてつき／＼しきや いかにも
わろき物好にこそ

百七十六段

黒戸ハ小松御門位につかせ給ふて。昔たゞ人におハしましゝ時。まさな事せさせ給ひしを忘れ給ハで。常にいとな
ませ給ひける間なり。御薪にすゝけたれば黒戸といふとぞ

此段黒戸の名義を辨ず

(ママ、七ノ誤)
百七十五段

鎌倉中書王にて御鞞ありけるに。雨ふりて後いまだ庭の晞かざりければ。いかゞせんと沙汰ありけるに。佐々木隠岐入道。鋸の屑を車につみておほく奉りたれば。一庭にしかれて泥土のわづらひなかりけり。とりためけん用意有難しと人感じあへりけり。此ノ事ある者の語り出たりしに。吉田中納言の。乾砂の用意やハなかりけるとの給ひたりしかばはづかしかりき。いみじと思ひける鋸のくず。鄙くことやうの事也。庭の儀を奉行する人。かハきすなごを儲るハ故実也とぞ

此段聞えたるまゝ也

百七十八段

或所のさふらひども。内侍所の御神樂を見て人に語るとて。寶劔をバ其ノ人ぞもち給へるなどいふを聞て。うちなる女房の中に。別殿の行幸にハ晝御座の御劔にてこそあれと。忍びやかにいひたりし。心にくかりき」その人ふるき典侍なりとかや

此段己が関り知る所にあらぬ事をしたりかほにいひ出で恥辱を蒙りけるを記せり。此類ハ間ある事にこそ。己が職分の事、理さへはかゞしからぬ輩識量の狭きまゝに他の道術を料れども。其ノ門に入らざれば中らぬ事のミお

百七十九段

入宋ニッソウの沙門シヤモン道眼上人ドウガンジョウジン。一切經イツサイキヤウを持来ヂライして。六波羅ロクハハラの邊ホトリやけ野ノといふ所に安置アンヂして。殊コトに首楞嚴經シュレウゴンキヤウを講カウじて那蘭陀寺ナラダジと号ガウす。其ひじりの申マウされしハ。那蘭陀寺ハ大門北ダイモンキタむき也と。江帥コウソウの説セツとていひつたへたれど。西域サイイキ傳法アンホウケン顯傳アンなどにも見えず。更サラに所見シヨケンなし。江帥サイカクハいかなる才覺オボツカにてか申マウされけん覺束トウドな」し。唐土サイメウジの西明寺キタムキモチロンハ北向勿論ホウケンなりと申き

此段大江匡房ノマサフサの辨ハ説セツに相サマ凌リョウある事を道眼ドウガンがいへるなり 畢竟ヒツキヤウ何の用にもたゝぬ事也

百八十段

さぎちやうハ。正月にうちたる毬打ギチヤウを。真言院シンゴンより神泉苑シンセンエンへ出して焼ヤキあぐるなり。法成就ホウジュウシュの池イケにこそとはやすハ。神泉苑シンセンエンの池をいふなり

此段神泉苑にて毬打ヤキアゲを焼揚ヤキアゲる事也

百八十一段

ふれくこゆき。たんばのこゆきといふ事。米春飾ヨネツキフルひたるに似ニたれば粉雪コユキといふ。たまれこゆきといふべきを。謬アヤマりてたんばのといふ也。垣カキや木のまたにとうたふべしと。ある物しり申き。昔よりいひける事にや。鳥羽院トバノおさなくおはしまして。雪のふるにかく仰サヌキせら」れけるよし。讃岐ニキのすけが日記カキに書たり

此段古き童謡の轉語を釋せり

百八十二段

四条大納言隆親卿。乾鮭といふ物を供御にまいらせられたりけるを。かくあやしき物まいるやうあらじと人の申けるを聞て。大納言鮭といふ魚まいらぬ事にてあらんにこそあれ。鮭のしらぼし何条事かあらん。鮎のしらぼしハまいらぬかハと申されけり

此段隆親卿の發明をいへり

百八十三段

人つく牛をバ角をきり。人くふ馬をバ耳を截てその標とす。しるしをつけずして人を傷らせぬるハ主の科也。人くふ犬をバ畜ひ飼べからず。是皆とがあり。律の禁め也

此段牛馬犬などの人を害するを榜示する律の法をいへり 當世馬に蹈馬御免とするすなど此遺風なるべし

百八十四段

相模守時頼の母ハ。松下禪尼とぞ申ける。守を入申さるゝ事ありけるに。すゝけたるあかりさうじのやぶればかりを。禪尼てづから小刀して。きりまハしつゝはられければ。せうとの城介義景其、日けいめいして候ひけるが。給

りてなにがし男にはらせ候はん。さやうの事に心得たる者に候と申されければ。其男尼が細工によも勝り侍らじとて。猶一間づゝはられけるを。義景皆をはりかへ候はんハ。遙に容易く候べし。班に候も見ぐるしくやかさねて申されければ。尼も後ハさは「／＼とはりかへんと思へども。今日ばかりハわざとかくてあるべきなり。物ハ破れたる所ばかりを修理して用る事ぞと。若き人に見ならハせて。心づけんためなりと申されける。いとありがたかりけり。世を治むる道。儉約をもとくす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を子にてもたれける。誠にたゞ人にハあらざりけるとぞ

此段松下禪尼の時頼に縁約を示されし殊勝をいへり 公父文伯ハ魯の重任たりしかども其母敬姜自績て文伯が富貴にして驕れるを誠しむ

百八十五段

城陸奥守泰盛ハ。さうなき馬のりなりけり。馬を引出させけるに。足をそろへて鬩をゆらりとこゆるを見」てハ是ハ勇める馬なりとて鞍を置かへさせけり。又足をのべて鬩に蹴あてぬれば。是ハ鈍くして過あるべしとのらざりけり。道をしらざらん人。かばかりをそれなむや

前段のつるでに泰盛が事をいひて藝に熟せる者ハ却て初心のごとくなるの用意をいへり

百八十六段

吉田と申馬乗の申侍りしハ。馬ごとに剛きもの也。人の力あらそふべからずとしるべし。乗べき馬をまづよく見て。強き所弱き所を知べし。次に轡鞍の具に危き事やあると見て。心にかゝる事あらば其馬を馳べからず。此用意を忘れざるを馬乗とハ申也。この秘藏の事也と申き」

前段のうつりなり

百八十七段

萬の道の人。假令不堪なりといへども。堪能の非家の人にならぶ時必勝る事ハ。たゆみなくつゝしみてかるくしくせぬと。ひとへに自由なるとのひとしからぬ也。藝能所作のみにあらず。おほかたのふるまひ心づかひも。をろかにしてつゝしめるハ得の本也。たくみにしてほしきまゝなるハ失の本也

此段聞えたるまゝ也 且慎といふ一字和漢に通して大切の事也 慎の和訓ハ土金傳授の場にこそあれ 心行事修行ハいふに及はず藝術亦同しかるべし 景行天皇の御子日本武尊東夷征伐に趣き給ふ時枉道して 伊勢ノ神宮に詣し御姨倭姫命に謁し給ふ時 倭姫命草薙劔に囊を添て日本武尊に賜り 慎て勿怠そとの給ひしかば事故なく東夷を平服せしめ給ひぬ 凡武術にて八方に眼を配るといふ事ハ兵の常談にして 源義経のミ獨十方に心を賦る 天よりハ流矢の来らん事を思ひ地にハ阱あらん事を慮るとかや 是則慎の義神道におゐて子細ある事也

百八十八段

或者子^{アルモノ}を法師になして。学問^{ガクモン}して因果^{イングハ}の理^リをもしり説経^{セツキヤウ}などして世わたるたつぎともせよといひけれハ。教^{ラシヘ}のまゝに説経師^ジにならなために。先馬^{マツ}に乗^{ノリ}ならひけり。輿車^{コシクルマ}もたぬ身の。導師^{ダウシ}に請^{シヤウ}ぜられん時。馬^{ウマ}など迎^{ムカヘ}におこせたらんに。桃尻^{モヂリ}にて落^{オチ}なんハ心^{ココロ}うかるべしと思^{オモ}ひけり。次に佛^{ブツ}の事^{コト}の後酒^{ゴウ}など勸^スむる事あらんに。法師^{ホフシ}の無^ム下^ゲに能^{ノウ}なきハ。檀那^{ダンナ}すさましく思^{オモ}ふべしとて。早歌^{サウカ}といふことを習^{ナラ}ひけり。二ッのわざやうくさかひに入^イければ。いよくよくしたく覺^{タシナ}えて嗜^シける程に。説経^{セツキヤウ}ならふべきひまなくて年^{トシ}よりにけり。此^{コノ}法師^{ホフシ}のミにもあらず。世間^{セカヘ}の人^{ヒト}なへて此^{コノ}事^{コト}あり。若^{ワカ}き程^{ハジメ}ハ諸事^{シヨコト}につけて身^ミをたて。大^{オホ}なる道^{ミチ}をも成^{ジャウ}じ能^{ノウ}をもつぎ。学問^{ガクモン}をもせん。行^{ユキ}末久^{マキウ}しくあらます事^{コト}ども心^{ココロ}にハかけながら。世^ヨをのどかに思^{オモ}ひて打怠^{ウチラコタ}りつゝ。まづさしあたりたる目^メの前^{マエ}の事^{コト}のミにまぎれて月^{ツキ}日^{ニチ}を送^{オク}れバ。ことくす事^{コト}なくして身^ミハ老^{オシ}ぬ。つるに物^{モノ}の上^{ウエ}手^テにもならず。思^{オモ}ひしやうに身^ミをも持^{モタ}ず。と」りかへさる^{ヨハヒ}齡^{ナヒ}ならねバ。走^{ハシ}りて坂^{サカ}をくだる輪^ワのごとくにおとろへゆく。されバ一ッ生^{ウツムネ}のうちに宗^{ソウ}とあらまほしからん事^{コト}の中^{ナカ}に。いづれか勝^{マサ}るとよく思^{オモ}ひ競^ケべて。第一^{ダイイチ}の事^{コト}を案^{アン}じ定^{サダ}めて。其^{ソノ}外^{ガイ}ハ思^{オモ}ひすて、一^{ヒト}事^{コト}を励^{ハゲ}むべし。一日^{イチニチ}の中^{ナカ}一時^{イチジ}の中^{ナカ}にも。数^{アマ}多^タの事^{コト}の来^キらん中^{ナカ}に。少^{オホ}も益^{エキ}の勝^{マサ}らむ事^{コト}をいとなみて。其^{ソノ}外^{ガイ}をばうち捨^{ステ}て大^{オホ}事^{コト}をいそぐべき也。何^{ナニ}方^{カタ}をもすてじと心^{ココロ}にとりもちてハ。一^{ヒト}事^{コト}も成^ナるべからず。たとへバ碁^ゴをうつ人^{ヒト}。一^{ヒト}手^テもいたづらにせず。人^{ヒト}にさきだちて小^コをすて大^{オホ}につくがごとし。それにとりて三ッの石^{イシ}をすてゝ。十^{ジュウ}の石^{イシ}につく事^{コト}ハやすし。十^{ジュウ}をすてゝ十一^{ジュウイチ}につく事^{コト}ハかたし。ひとつなりとも増^{マサ}らんかたへこそつくべきを。十^{ジュウ}までなりぬれば惜^{オシ}くおぼえて。多く増^{マサ}らぬ石^{イシ}に」ハかへにくし。是^{コレ}をも捨^{カレ}ず彼^{カレ}をもとらんと思^{オモ}ふ心^{ココロ}に。彼^{カレ}をもえず是^{コレ}をも失^{ウシナ}ふべき道^{ミチ}也。京^{キョウ}にすむ人^{ヒト}急^{イッ}ぎて東^{トウ}山^{サン}に用^{ヨウ}ありて。既^{スデ}に行^{ユキ}つきたりとも。西山^{シサン}のゆきて其^{ソノ}益^{エキ}勝^{マサ}るべき事^{コト}を思^{オモ}ひ得^ユたらバ。門^{モン}より歸^{カヘ}りて西山^{シサン}へゆくべき也。こゝまで来^キつきぬれば此^{コノ}事^{コト}をバ先^{マツ}いひてん。日^{ニチ}をさくぬ事^{コト}なれば。西山^{シサン}の事^{コト}ハ歸^{カヘ}りて又^{マタ}こそ思^{オモ}ひたくめと思^{オモ}ふ故^{ユヘ}に。

一時の懈怠則一一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必成んと思ハズ。他の事の破るゝをもいたむべからず。人の嘲をも恥べからず。萬事にかへずしてハ一ッの大事成べからず。人の数多ありける中にて。或者ますほの薄。まそほのすすき。などいふ事あり。わたのべのひじり此、事を傳へ知たりと語りけるを。登蓮法師其座に侍りけるが聞て。雨の降けるに蓑笠やあるかし給へ。彼、薄の事習ひに。わたのべのひじりのがり尋ねまからんといひけるを。あまりに物さはがし雨やミてこそと人のいひければ。無下の事をも仰せらるゝ物哉。人の命ハ雨の晴間をまつ物かハ。我もしにひじりもうせなばたづねきゝてんやとて。走り出て行つゝならひ侍りにけりと申傳へたるこそ。ゆゝしくありがたく覚ゆれ。敏ときハ則功ありとぞ論語といふ文にも侍るなる。此薄をいぶかしく思ひけんやうに。一大事の因縁をぞおもふべかりける

此段の最初の事 小學荀子語曰無用之辨無急之察棄不治とあるに同じ 以下も人の行ひを励ますにハ尤の比喩故事どもにこそ

百八十九段

けふハその事をなさんと思へどあらぬいそぎ先出来てまぎれくらし。まつ人ハさハリありてたのめぬ人ハ来り。頼むたる方の事ハたがひて。思ひよらぬ道ばかりハかなひぬ。わづらハしかりつる事ハことなくて。やすかるへき事ハいと心ぐるし。日々に過行さまかねて思ひつるに似ず。一年の事もかくのごとし。一生の間も又しかなり かねてのあらまし皆透ひゆくかとおもふに。をのづからたがはぬ事もあれば。いよゝ物ハ定めがたし。不定と心得ぬるのみ。實にてたがはず

前段の餘情也

百九十段

妻といふものこそ。おのこのもつまじきものなれ。いつも独ヒトリずみにてなどきくこそ心にくけれ。誰がしが聲ムコに成ぬとも。又いかなる女をとりすへて相住アイヌムなど聞キつれば無下ムゲに心を取りせらるゝわぎなり。ことなる事なき女を。よしと思ひさだめてこそそひたれと鄙イヤシくもをしはかられ。よき女ならバ此男コノオトコをぞらうたくして。あが佛とまほりゐたらめ。たとへばさばかりにこそ覚トえぬべし。まして家のうちを行ユコなひ治めたる女いと口おし。子などいできてかしづき愛アイしたる心うし。男なくなりて後尼アトニに成て。としよりたるありさまなき跡アトまで浅まし。いかなる女なりとも。明暮クレそひ見むにハいと心づきなくにくかりなん。女のためも半空ナカゾラにこそならめ。餘所ヨソながら時々トキトキ通ひすまんこそ。年アケ月経ツキてもたえぬなからひとならめ。あからさまに来てとまりゐなどせんハ。めづらしかりぬべし

此段人にもよるべし。いつもひとりずみ……是もいはれぬ名聞俗メウモンゾクにいふ表氣ウハキの沙汰也。但シ兼好ホウカイが法界ホウカイ悋氣リンキなるべし。ともかくも面々メイメイの料簡次第リョウケンたるべし。

百九十一段

夜ヨに入りて物のはへなしといふ人いと口おし。萬の物のきらかざり色イロふしも。夜ヨルのミこそめでたけれ。昼ヒルハ事省助コトシヅケ及マデたる姿スガタにてもありなん。夜ヨルハきららかにばなやかなるさうぞくいとよし。人の氣色ケシキも夜ヨルのほかげぞ。よきはよく。物いひたる声コエも。暗クラくて聞キたる用意ある心にくし。にほひも物の音ネも。たゞ夜ヨルぞひときはめでたき。さして異コトナる事なき

夜。うち更フクて参マイれる人の。き」よげなるさましたるいとよし。わかきどち心とゞめて見る人ハ。時をもわかぬ物なれば。ことにうちとけぬべき折オリフシ節ケハレぞ。褻ケハレ晴ハレなくひきつくるはまほしき。よき男の日くれてゆするし。女も夜更フクる程にすべりつゝ。鏡カガミとりて顔カホなどつくるひ出るこそおかしけれ

此段ハ人々の心得とも成べし

百九十二段

神佛カミホトケにも。人の詣マウでぬ日夜ヨルまいりたるよし

同前

百九十三段

くらき人の。人をはかりて其チ智チをしれりと思ハん。更サラにあたるへからず。拙ツタナき人の碁ゴうつ事ばかりにさタクミとく巧タクミなるハ。賢カシコき人の此ケイ藝ゲイにをろかなるを見て。己ヨノレが智チにをよばずと定サダめて。萬の道のたくミ。我ガ道を人のしらざるを見て。をのれ勝スゲれ」たりと思はん事。大なる誤アヤマりなるべし。文字モジの法師アンシヤウ暗證ゼンジの禪師タガヒ。互にはかりてをのれにしかずと思へる。共トモにあたらず。己ヨノレが境界キヤウガイにあらざるものをバあらそふべからず。是非ゼヒすべからず

前の百七十八段に同し

百九十四段

達人タツジンの人を見る眼ミハ。少スコシもあやまる處トコロあるべからず。たとへバ或人アルの。よに虚言ソラゴトを構カマへ出して人をはかる事あらんに。すなほに実マコトと思ひて。いふまゝにはからるゝ人あり。あまりにふかく信シツを起ヲコして。猶煩ワツらハしく虚言を心得ソふ人あり。又何ナニとしも思はで心をつけぬ人あり。又聊イサ、カオボツカ覺束なくおぼえて。たのむにもあらずたのまずもあらで。案アンじゐたる人あり。又まこコとしくハ覺えねども。人のいふ事なれば。さもあらんとてやみぬる人もあり。又さまぐに推スし心得たるよしゝて。かしこげにうちうなづき。ほゝえみてゐたれど。つやゝしらぬ人あり。又すいし出してあはれさるめりと思ひながら。猶あやまりもこそあれとあやしむ人あり。又ことなるやうもなかりけりと手を打ウチて笑ワラふ人あり。又心得たれどもしれりともいはずおぼつかからぬハとかくのことなく。しらぬ人とおなしやうにて過スグる人あり。又此コノ虚言の本ホ意イをはじめより心得て。少シも欺アザムかず。かまへ出したる人とおなじ心に成ナリて。力を合チカラする人あり。愚者グシヤの中の戯ナカれだに。知シたる人の前マヘにてハ。此さまぐのえたる所コトバ。詞カホにても顔カホにてもかくれなくしられぬべし。』まして明アキらかならん人の。まどへる我等レラを見んこと。掌タナゴ、ロウヘの上の物を視ミルがごとし。但マデかやうのおしはかりにて。佛ナズラ法までを准ナズラへいふべきにはあらず

孟子離婁篇ニ曰 存セル乎人ニ者莫シ良キハ於ニ眸子ヨリ眸子ハ不能レ掩フコト其ノ惡ヲ也 中正ケレハ則チ眸子ヲ瞭カニ焉ヲ 中不レ正カラ則チ眸子ヲ眊カニ焉ヲ 聽キ其ノ言ヲ也 觀ミ其ノ眸子ヲ人ニ焉ニ 瘦ヤ哉 さて又兼好が己を達人にして虚言をいふにもきくにも種々あるをいへれど 是レ程に箇條を立すともとぞ覺ゆる 尤モ無益にこそ 結文の佛ナズラ法しり自慢又心得がたし